

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.238

ISSN 2432-5295

ぽかぽか

C O N T E N T S

- ◆【ぽかぽか】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～07
- ◆新人紹介…08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙

ぽかぽか

日本には、地球が太陽の周りを一巡する三六五日を二四等分した二四節気という暦があります。本号がみなさんのお手元に届く頃には「春分」を過ぎ、春も後半に入っていることと思いますが、企画は虫も目覚める「啓蟄」の頃。テーマは「ぽかぽか」としました。

ところで、「春分の日」は「秋分の日」とともに国民の祝日です。これらは「国民の祝日に関する法律」という法律で定められています。古来からの二四節気の暦を「国民の祝日」として現代の法律で定める国。そんな日本を誇りに思います。ちなみに、法律では「春分の日」は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」日だそうです。

レターズアルパック編集委員会

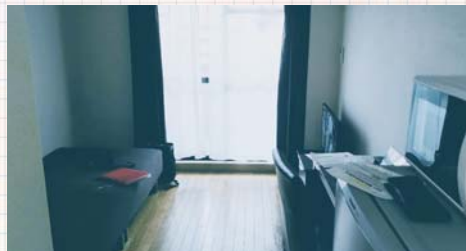


桜が降る夜は

辻寛太：
地域再生デザイングループ



桜：新生活の買い出しついでに寄った二条駅



窓：引っ越した日の部屋

今年の冬は長く寒い日が続き、雪もたくさん降りました。社会では、インフラ機能が停止し、都市部では、電車が止まり、地方では車の立ち往生が起きました。また、断水や停電が起きた地域もありました。

冬の雪は社会に厳しさを突きつける一方で、春になれば様々な恩恵をもたらしてくれます。地下に浸透した地下水は湧き水として、川へ流れ出た雪解け水は、ミネラルを多く含む農作物の生育や豊かな漁場の礎となります。

自然が雪解けの季節を待つように、私にとっても日の温かみを感じる時期は、新しい生活の始まりを感じさせる特別な存在になっています。

昨年の3月、大学院の修了式の後、3年間にわたり自分の部

屋より長く過ごした研究室の整理を終え、京都のワンルームマンションに移った時のこと、6階の新居の窓から入ってくる外の空気は、春の温かみがある一方で、冷たさも残り、それは新しい生活が始まるわくわく感と、家具だけが置かれた何も無い部屋での不安感が入り混じった自分の気持ちそのものでした。移ってから4月1日までの数日間は、新生活を楽しむ一方で、自分が学生なのか社会人なのか、立場と居場所がないような不安が大きくなっていったのを覚えています。それでもいざ新生活が始まると、雪は一気に解け、激流の中で日々は過ぎ、ふと季節を感じた頃には冷たさなんて全く感じないような季節になっていました。

先日仕事で母校を訪れた際、よく前を通っていた美容室が閉店しているのを見て、一年の時の流れを感じました。長いようであつという間に過ぎたこの一年の経験が、自分の中で養分となり、新しい芽吹きとなれば良いなと思います。ぽかぽかする頃に、社会人1年目を振り返り、今度は新しいメンバーを迎え入れる側になったことを実感しているこの頃です。

薪ストーブでぽかぽか生活

江藤慎介：
地域産業イノベーショングループ

この冬は気温が低くなるのが遅かったものの、12月以降は寒い日が多く、原稿を書いている今朝も京都では朝から雪が降っています。そのよ
うな冬に我が家で活躍するのは薪ストーブ。自宅を新築した際に思い切って導入した薪ストーブは、初期費用や燃料となる薪代金もそれなりにかかる「高い買い物」。家が暖まるまで時間がかかる、薪のにおいは近所付き合いにも影響するなど、問題も多いなあと実体験しつつも、遠赤外線の効果で体の芯からぽかぽかと暖まるのはまさに「天国」。エアコンを付けているのに冷感性で手足が冷える・・・なんていう問題もなく、夜寝るときも体が暖まっているので寒くなることはありません。

薪ストーブの楽しみはこれだけではありません。薪ストーブの上にやかんを置けば、沸いたお湯でコーヒーを。また、新聞紙とアルミホイルでさつま芋を包んで入れれば、30〜40分後には焼き芋に。わざわざ焼き芋を買わなくても、蜜のある焼き芋が楽しめる、冬のおやつに最適です（焼き玉ねぎなど、他の野菜・果物もオススメです）。



薪ストーブで焼く前のピザ

締めくくりはピザ。生地から手作りし、子どもたちとトッピングしたピザを薪ストーブに入れば、5分も経たないうちに出来上がり。少し焦げ目のついたピザの美味しさと言ったらたまりません。体だけでなく心もぽかぽかする薪ストーブは、暮らしの楽しさが増すこと間違いなし！

火を燃やすことが少なくなった現代において、最近はワークシヨップでも焚き火が流行っています。家に居ながら燃える火の揺らぎを見ていられる幸せは何とも言えません。冬の間は在宅勤務が増えそうです。

「ぽかぽか」から日本語の奥深さを窺い知る

清水紀行：
都市・地域プランニンググループ

「ぽかぽか」・・・このように五感から感じ取れる状態・様子・心情などを表す言葉は擬態語と呼ばれますが、英語では「onomatopoeia」というそうです。では、この「ぽかぽか」という言葉からは何が連想されるでしょう？

最初に思い浮かぶのは、暖かい日差しを感じる気持ちの良い様子でしょうか。でも、カタカナ表記「ポカポカ」にしてみると、子どもが何かを叩いている様子が浮かんだりもします。

今回、このお題で原稿を書いたと言われているから、何気なく「ぽかぽかねえ・・・」と考えていたのですが、このように同じ言葉を重ねて、複数の意味をもつ擬態語が、意外と身の回りで使われていることに気づきました。例えば、「ごろごろ」。

「休みだからってごろごろしていないで子どもを遊びに連れて行って！」「昨日、飲み過ぎでお腹がゴロゴロ鳴っているよ」とか。

次に「だらだら」。

「予定がない日はいつも家でだらだらしているね」「年をとるとダラダラと話が長いよ」とか。

これが英語なら、「ごろごろ」は「chill」とか「grumble／rumble」「だらだら」は「lazy」とか「ramble」という感じなのでしょう。

一般的に、日本語は他の言語と比べて難しいと言われますが、その理由のひとつに動詞が少ないことが挙げられます。そして、それを補うために「擬態語／onomatopoeial」は発展し、その状態などをより分かりやすく表現できるようになったと考えられています。

意識して擬態語を使うことはないですが、今回、「ぽかぽか」を通して、改めて日本語の奥深さを窺い知る機会となりました。

ちなみに、前に挙げた例文は私のことではないので悪しからず・・・。



レンギョウが咲く頃

三輪泰司：
名誉会長

その日、神戸も京都も雪は降らなかったですが寒い朝でした。阪神・淡路大震災、マグニチュード7.3です。トルコ南部では、もっとひどいことになっています。自然災害だけでなく、人間と人間の争いが続き、ウツトウシイことです。世の中、灰色です。

椿の一輪挿しを置いている灰色のテーブルに「蠟梅」の黄色い花びらをまきました。ほんのりと気品ある香りがひろがりま

す。「蠟梅」は「山茶花」と同じ



11月頃から1月じゅう咲いています。「梅」がそれに続きます。「山茶花」は「茶梅」ともいいます。みな「梅」が付くのですが、「蠟梅」はクスノキ目・ロウバイ科の落葉樹。「山茶花」はツツジ目ツバキ科の常緑樹。「梅」はバラ目バラ科の落葉樹。それぞれ違うのです。「椿」も違います。ツツジ目ツバキ科常緑樹。2月頃から咲きます。

多様性・diversityとは「雑多」ではなく、似たものの集合で、「包摂」可能です。この「概念規定」で間違っていないでしょうか？この多様な「梅たち」。中国原産です。千年以上前から、そして、詩や絵と一緒に伝わってきています。「寒梅」に託した漢詩も知られています。

さて、お次は「黄色いレンギョウ」です。シソ目モクセイ科レンギョウ属の落葉樹。連翹、黄壽丹ともいいます。3〜4月、ぽかぽかと春を呼ぶのです。

このスケッチは、1982年（昭和57年）3月3日、桃の節句の日、50歳です。



ぽかぽかのカタチ

内野絢香：
生活デザイングループ

「ぽかぽか」と聞いて連想したのは、春の少しうわついた空気を傍目に見ながらも、おひさまの温かい日差しを一人で伸びをしながら堪能しているシーンだったのですが、初めて迎える関西での春の訪れは南の地域で過ごして身に着いた感覚よりも遅い気がして、そんな空気が待ち遠しくなりました。

待ち遠しくなったのは良かったのですが、まだぽかぽかできてないのに何を書こうかなとぼやいていたら、たき火に誘ってもらいました。急にたき火に行けることが決まり、くすぶっていた自然遊び大好き精神が解き放たれ、たき火に行けるまでの期間は私自身がソワソワし、春の少しうわついた空気を放っていた気がします。

待ちに待った「たき火の日」、会場に到着すると懐かしの草木が燃え上がる匂いがしてきて、気持ち之急にぽかぽかを通り越し、アツアツの状態になった瞬間、「冬場の祖父からはよくこの匂いがしたな・・・」と家によくたき火をしていた久しく会っていない祖父を思い出し、気持ち之急降下して感傷に浸るという急な暗転に、なぜか私自身戸惑いました。

そんなことはさておき、自然遊び大好きなのに、何もできな



たき火と焼きマシュマロ

私は着火も手伝わず、火の面倒も見ず、成功しない焼きマシュマロづくりひたすら打ち込み、たき火での牛乳パックの偉大さに感動し、小枝拾い中のダジャレ大会に翻弄されながらも、ひとしきり楽しんだ後に、揺れる火をながめては、心が深呼吸をしているリズムを、ただただ感じていました。

たき火中、ぽかぽかできていたのかは謎ですが（火から離れたら寒く、近づけば熱く、良い距離感をつかみきれなかったような・・・）、ぽかぽかのネタ探しのためにたき火に行けたことが、まずぽかぽか。ぽかぽかのネタのために、焼き手を割った時に湯気がでていたら「ぽかぽかしてるよ！」と写真を撮ってもらえた。りしたことが「ぽかぽか」でした。

春の兆し

新開夏織：

建築プランニング・デザイングループ

今年の冬も厳しい寒さとなりました。一月には最強寒波が日本中を襲い、私たちの生活や交通に大きな影響を与えました。寒い冬にはぼかぼかの鍋や温泉などの楽しみはありますが、寒さに弱い私はどうしても部屋に籠りがちになってしまいます。近頃はぼかぼかとした日差しが少しずつ顔を覗かせるようになり、つい先日には地元静岡の河津桜も見ごろを迎えたというニュースが届きました。

河津桜は二月上旬のまだ寒い時期に開花する早咲きの桜で、静岡県河津町が発祥とされています。大きくて濃いピンク色の花びらが特徴で、まだ寂しげな



春の訪れを教えてくれる実家の桜

冬の景色をひととき鮮やかに彩ります。今年は例年より遅れての開花だったようですが、河津桜の名所には、既に多くの方が見物に訪れているそうです。

寒さが少し和らいだとはいえ、まだまだ朝晩は冷え込む中、力強く咲き誇る姿を想像すると「春はもうすぐそこだよ」と背中を押される気持ちになります。

一方で、春とともにやってくる大敵が花粉です。私も数年前から突如、花粉に悩まされるようになりました。

花粉症には、じゃばらが効果的という話を聞きます。じゃばらは和歌山県北山村が特産の柑橘で、花粉症の緩和に有効と期待される成分が他の柑橘に比べて多く含まれていることから、近年注目を集めています。

私が花粉症になって数年間は様子見と言いつつ特に対策をしてこなかったのですが、現在奇縁にもお仕事でよく北山村に通わせていただいていることもあり、私も試してみようかと思っています。

ぼかぼかな春を感じられる日には、外に出てお散歩でもしたくなりますが、既に花粉との闘いは始まっています。敵とうまくつき合って、今年こそは穏やかに春を楽しめるといいなと思っています。

桜の木の下で語りたい未来について

西村創：

都市再生・マネジメントグループ

朽化やバリアフリーなどの社会的要求の変化への対応が必要となってきたことから建替えの検討を行ってきた結果として、それぞれの権利者の方が、将来について悩み、考え、最終的に建替えを行うという大きな判断となりました。



低層でゆとりのある住棟配置であり、緑豊かで閑静な団地として成熟し、植栽も手入れが行き届いており、非常に心地よい団地です。写真は昨年、団地内の

去るポカポカ陽気の3月5日に3年ほど前からお手伝いしている堺市の下野池第2住宅の団地建替え事業で一括建替え決議集会を行いました。

事業のご紹介は、別の機会にさせていただきたいと思いますが、下野池第2住宅は、昭和45年に日本住宅公団より分譲を受け、築53年を経過した410戸の団地です。分譲当初から現在に至るまで、自主管理を継続しており、コミュニティ形成と合わせて、自分たちの手で団地内建物を維持管理されてきました。

桜の様子なのですが、コロナ禍になる前は、皆さんでお花見をされていたそうです。

一括建替え決議が可決されたので、今年の桜が今の団地で見ることのできる最後になってしまうことになりました。建替えが決まるまでも長い検討期間を要しましたが、これからようやく本格的に事業がスタートし、新しく再建されるマンションに戻ってこられるのは、まだ4年ほど先になります。

ぜひ団地の皆さんとポカポカ陽気の桜満開の下で、4年後の未来についてお話ができればなと思っています。



冬の登山、キャンプの提案



頂上からの眺望

小川直史：

地域再生デザイングループ

現在、奈良県御杖村にある「みつえ青少年旅行村」のリニューアル検討を支援しています。

老朽化し、徐々に現代のキャンプニーズに合わなくなってきた施設をリニューアルするとともに、昨年度から営業を始めた冬季の利用促進も大きな検討課題の一つです。

旅行村の隣には三重県と奈良県に跨る三峰山（標高1235メートル）がそびえており、冬季には霧水が見られることで有名です。「霧水」という大きなコンテナをキャンプ利用と結びつけることはできないか。色々考えていましたが、まずは体験してみよう、と検討メンバーと共に1月末に登ってきました。

まず冬山の登山。最高でした。落葉樹がゲートのように連なる雪道や眼下に見えるぼこぼこと隆起した山々はまちなかで見られる景色とはまるで違い、登りながらわくわくします。また、冬の冷たい空気がじんわり汗をかいた身体にとっても気持ち良い。暑さや虫が苦手な人には冬山オススメです。ただ残念ながら霧水は見られませんでした。下山し、そのまま宿泊。テント泊は不安で、バンガローに泊まりました。晩御飯は鍋。ビール片手に焚き火を囲みながら外で食べました。朝起きると外は雪。寝起きの身体に冷たい外の空気がこれまた気持ち良い。その後、村内の温泉に入浴。思わずため息がこぼれます。お湯に包まれながら、身体がほぐれていきました。

一連の体験をしてみて、しっかり冬の登山・宿泊（バンガロー泊）にハマりました。次回は、まず宿泊（今度はキャンプ）して、次の日の早朝から登山、霧水を見て、温泉に入浴という行程を試してみようと思います。無論、この体験を活かして、より良いリニューアル案を鋭意検討中です。



『熊本産 MaaS シンポジウム～「MaaS」それは、新しい移動サービスの形～』を開催しました

中川貴美子：

サステイナビリティマネジメントグループ

脱炭素化社会への対応、多様なライフスタイルへの対応、また、誰一人取り残さない移動手段の確保などの観点から、新しい移動サービスの形（MaaS（Mobility as a Service の略））を模索する動きが広がっています。

熊本市では、昨年度から、地域の交通事業者の方や経済団体等の方が集まり、熊本市としてどのようなMaaSを進めていくのか官民連携の勉強会の開催からスタートし、熊本ならではのMaaSを生み出していこうと、「熊本産MaaS」と銘打ち、取り組みを進めています。昨年度の勉強会では、熊本産MaaSの目指す姿として、「五輪の書」とりまとめました。今年度は、その方向性を具現化するための検討を引き続き進めるとともに、その目指す姿を市民の方々とともに広く共有するためのシンポジウムを開催いたしました。

シンポジウムでは、市長から「熊本産MaaSのこれから」と題して、現在の取組そして、MaaS導入による未来の「今より移動が便利に、ちよっと楽しい」暮らしについて、子育て世帯、通勤者、観光客などペルソナ別に紹介されました。

は、市長、東京大学伊藤准教授、交通事業者（バス事業者、シェアサイクル運営事業者）、市民若者代表として熊本大学生が登壇し、当社畑中コーディネーターのもと、移動サービスを軸に、「地域経済、地域環境、地域社会」をどう統合的により良くしていくのか、について意見交換がなされました。

当日の様子は、youtube 熊本市公式チャンネルで公開されています（熊本産MaaSで検索）。当業務は、九州事務所とともに取り組んでいます。



会場の様子

川越市で『見る目を養う』ワークショップを開催しました

答谷友紀子：

ソーシャル・イノベーションデザイングループ



川越市の文化財といえば蔵づくりの街並み、川越まつりが主に挙げられる中で、地元の身近な文化財にも目を向けてもらう取り組みとして開催しました。

ここで一つ、小断を。建築物や場所の価値は何をもとに形成されるのでしょうか。文化財に指定されるものの多くは主に建築学的価値、歴史的価値が根拠です。しかし、世の中の的に価値のある建築物とはこの2つの評価軸のみで選ばれるものではありません。例えば、原爆ドームは文化財に指定されていますが、原爆ドームが保存に向かったのは、忘れてはならない記憶の象徴であり、人々の様々な思いが寄せられた建築物だったからです。このように、建築物や場所には人々の思いが寄せられます。

このワークショップでは、各場所において参加者がどんな思い入れや経験、思い出を持っていて、個人と場所のつながりを記憶や体験という形で尋ねたのです。それにより、自分と場所のつながりや自分にとっての場所の価値を意識してもらうことができ、また、地域の皆で場所にまつわる記憶や体験を共有することで、地域における場所の位置付けや価値が分かります。

ワークショップのテーマは「見る目を養う」ですが、「見る目」とは、教科書的な価値観に基づいて場所を見るのではなく、自分や地域とのつながりに基づいて見るということです。そうすることで「こんな場所も私や地域にとって大切なのだ」という新たな場所の発見、地域資源の再発見に繋がります。既に評価が定まっている文化財においても、また違う価値を描くことができるかもしれません。

そのような場所は外の目から見ても空間的な魅力がありません。例えば写真にある池は双子池と呼ばれていて、昔は牛を洗ったり、スイカを冷やしたり、子どもらの遊び場になっていたそうです。また、喜多院も歴史上重要な寺院ですが、地域の方々も身近で親しみのある関わり方をしていて、そのせいか、いい意味で寺院らしくない空間の魅力があるのです。

現代芸術の国際展に携わる自治体等担当者の交流及びネットワーク化支援

豊福宏光：

地域産業イノベーショングループ

創造都市の取組を推進する地方自治体等の多様な主体を支援するプラットフォームである創造都市ネットワーク日本(CCN)活動の一つです。

創造都市とはグローバルゼーションと地域情報経済化が急速に進んだ21世紀初頭にふさわしい都市のあり方の一つで文化芸術と産業経済の創造性に富んだ都市です。

また、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)も、世界各地の文化産業が潜在的に有している可能性を都市間の戦略的連携により最大限に発揮させるための枠組みとして、2004年より「創造都市ネットワーク」事業を開始し、7つの分野で創造都市を認定、相互の交流を推進しています。

そして文化庁では、文化芸術創造都市推進事業において創造都市ネットワーク日本を通じて国内の文化芸術創造都市間のネットワーク強化をはじめ、政策研究や意見交換などの取組を支援しています。

その創造都市ネットワーク日本は、平成25年(2013)1月13日に創造都市の取組を推進する(または推進しようとする)地方自治体等の多様な主体を支援するとともに、国内及び世界

の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームとして設立されました。現在は「多様な文化芸術創造都市への取り組みを通じて、SDGsの達成にも貢献できるプラットフォーム」としての発展をビジョンに掲げ事業を推進しています。

アルパックは令和4年度(2022)のCCN事務局を担っており、様々な事業の中で私は「現代芸術の国際展部会」の活動支援を担当し、同年度は岡山芸術交流開催中に岡山市にて、国内各地で開催されている現代芸術の国際展に携わる自治体等担当者が課題やノウハウを共有する担当者ミーティングを実施しました。今回は、企画段階時に国際展部会員に対して取り扱ってほしいテーマ(課題や関心事等)のアンケートを実施、その結果を基にテーマに適した自治体が話題提供し、その後参加者同士が活発な意見交換やノウハウの共有が行われました。

今後も組織体制や運営方法が多様な各国国際展の課題やノウハウ等を共有し、自治体や団体の更なる交流やネットワーク構築の支援をしていきたいと思っています。

地方都市における新しい 土地利用コントロールのあり方を考える

橋本晋輔：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ



総合計画に示す「市内のバランスのとれた発展」のイメージ

島根県松江市では、持続可能なまちとするために、「一極集中によるコンパクトシティ」ではなく、「市内のバランスのとれた発展」をめざすことを打ち出しており、その実現に向けて、どのように土地利用をコントロールしていくのがよいのか、検討を続けています。

松江市（松江圏都市計画区域）の土地利用コントロール手法は、線引き制度（市街化区域と市街化調整区域による区画）が中心で、調整区域では基本的に開発が認められません。一方、調整区域にある集落地での人口減少は深刻さを増しており、土地利用規制を緩やかにするべきではという意見がこれまであげられてきました。そこで松江市では、開発許可制度を活用し、調整区域であっても一定の区域内であれば指定された用途の建築物（住宅など）

が立地できるように制度（緩和区域制度）が導入されています。

しかし、立地が認められるのは基本的には指定された用途の建築物だけです。たとえば、調整区域に立地しているIT企業から、事業拡大のために事務所兼用住宅を事務所転用したいという相談を受けても、事務所が事前に指定された用途でなかったために転用が認められるまでに時間を要したケースなどが発生しています。人々の暮らしや活動のニーズの多様化が進む中で、今まであまり考えられなかったような、地域の活性化につながる新しい建築物の立地ニーズが生まれてくることも想定されます。市街化区域、調整区域と単純に線を引くのではなく、その時々時代の流れや地域の状況を踏まえて、市街地の拡散は抑制しつつも、うまくニーズを受け止められる、柔軟できめ細やかな土地利用コントロールが必要で

す。松江市では、今年の2月に線引き制度から、線引き制度ではない新しい土地利用コントロール手法に変えていくことを発表しました。今後、具体的な土地利用コントロール手法を検討していくことになりませんが、これからの時代の地方都市のモデルとして、新しい土地利用コントロールのあり方を打ち出していくことが求められます。

びわ湖マラソンで、スポーツ×カーボンニュートラルに関する展示とアンケートを実施しました

高瀬咲：

地域再生デザイングループ



3月12日（日）、びわ湖マラソンの参加者に向けたWELCOMEフェスタの会場で、スポーツ×カーボンニュートラルと題してリーフレットやパネルを使った展示・発信とアンケートによる意識調査を行いました。

スポーツとカーボンニュートラルという一見聞きなれない組み合わせですが、スポーツ分野においても、温暖化による気温上昇は熱中症やウインタースポーツへの影響等が懸念されており、CO₂削減に向けた啓発の動きが高まっています。

アルパックは現在、滋賀県からの受託で「スポーツイベントに係るCO₂ネットゼロ実現に関するガイドライン」の策定を支援しており、ガイドラインに関連し、びわ湖マラソンの参加者に向けてカーボンオフセットやCO₂ネットゼロについて発信する機会としてブース出展しました。



会場では、自分が会場に来るまでの間にどれくらいCO₂を排出したかがわかるツールを用意し、CO₂排出について身近に考えてもらうとともに、日々のスポーツ活動で行うことができる脱炭素の取組をリーフレット等で発信しました。

また、アンケートの回答者に、地産地消による環境配慮を意識し、琵琶湖のヨシを使ったノートや、滋賀県産の飲料等をノベルティとして配布したのですが、県外からの参加者も多くお土産としても好評でした。

マラソン終わりということですが皆さんお疲れの中でしたが、多くの方にお越しいただき盛況に終わることができました。参加者がスポーツを通して温暖化について身近に考えていただける機会となっていたらよいと思います。

アルパックの
いいところ伝え隊！



倉見祐子
企画政策推進室

2 月から企画政策推進室に配属になりました、倉見祐子です。

出身は滋賀県で、織田信長が築いた幻の城があった町で育ちました。城跡がある山に登り、そこから町や西ノ湖（琵琶湖の内湖）を見下ろす時は、天下人の気持ち味わうのが好きな子でした（笑）。

趣味は本屋に行くこと。今は週1回程度しか行きませんが、行くのだいたいコースは決まっています。まず、ビジネスコーナーの平置きと生誌をチェック。世の中で流行っていることや課題が大まかに把握できます。お次は料理コーナー。「手早く・手間なし・手抜き」を叶える料理のレパートリーを増やすことは死活問

題なので、チェックにも力が入ります。そしてその時々で気になるコーナーをぶらぶらし、締めは絵本コーナー。子どもが生まれてから絵本の魅力にハマり、毎週のように買い足すうちに、我が家の本棚は名作から歴史、宇宙、妖怪、恐竜、落語、危険生物など、子どもと親の好みが混ざり合った素晴らしい本棚になっています。こうして本屋さんで本を探す・選ぶ・感じる時間は、自分にとって趣味と実用を兼ねたりリフレッシュの時間です。

これまでは生活者の暮らしを支える商品やサービスを提供する会社に勤め、広告宣伝業務に長く従事してきました。自分自身が子育てと仕事に忙しくする中で、商品・サービスという一時的な解決策ももちろん必要だけれど、もっと根本的に暮らしの基盤を整えることに携わりたいと思いついて、アルパックでお世話になることにしました。とはいえ、私はまちづくりのことは専門外。しかし「持続可能な地域づくりを目指す」という理念のもと、各分野の素晴らしい専門家が集まった「アルパック」という会社のPRをすることで、子ども達ももっと安心して生き生きと暮らせる地域づくりに、私も貢献したいと思っています。

これからよろしくお願いします。

大阪

「ランチタイムは、...」

大阪事務所 前江田晴香

大阪事務所の周りはオフィス街ということもありランチスポットは山ほどあるはず!!安くておいしい定食屋、おしゃれなお店でイタリアン♪フレンチ♪などなど。

ですが、私のランチは手っ取り早く近所の和食屋さんのお弁当、コンビニのお弁当、たまに自前のお弁当を社内で食べるというスタイル。代り映えしないランチタイムです。

たまには気分を変えてと、キッチンカーで調達してみました。隣のビルの前に週2、3回色々なキッチンカーがやってきます。今回はキーマカレーを頂きました。今日どこにどんなキッチンカーが来ているのかを教えてくれるアプリも発見しました。それを駆使して

天気が良い日は少し散歩もかねて探しに行くぞ!と意気込んでいます。ぽかぽかした日差し、気持ち良い季節が近づいているので外に用意されている席でも食べてみたいです。暑すぎる季節が来るまでに。



九州

「旅へのいざない～福岡の魅力」

九州事務所 山崎裕行

新型コロナウイルス感染症に全世界が振り回されて早3年。日本も幾度と感染拡大を経験し、まだ当分の間はウィズコロナということで、付き合っていないといけません。しかし一方で、人々の移動については、当初よりもだいぶ変化してきました。みんな、旅行に行きたくてウズウズしていたのでしょう。福岡市内も国内だけでなく、航空便が回復したこともあり、韓国、台湾、香港などからの来訪者もよく見るようになりました。油断はできませんが、感染予防をしっかりとした上で、旅を楽しみたいものです。

ふと、旅行先としての福岡の良い所はどんなところかなと思いつかべてみました。

- 日本の中でこれほど交通利便性の高い都市はない。福岡空港、JR博多駅とまちの中心である天神までの時間・距離が近い、天神から福岡空港まで地下鉄で約10分。そして、天神や博多駅のバスターミナルからは九州各地へ高速バスが運行。もちろんJR九州の個性的な特急列車・新幹線も外せません。
- ラーメン、水炊き、もつ鍋、玄界灘の海の幸、あまおう、柿、梨、ぶどうなどのフルーツ、筑後の日本酒など、食が豊かで美味しい。しかも、そんなに高いわけではない。屋

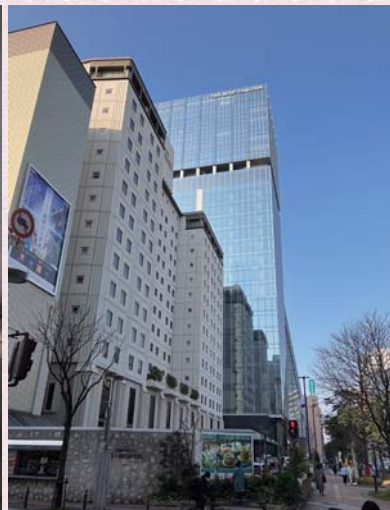
台では刺身は食べられませんが、福岡・博多らしいメニューがそれぞれあって、満足・満腹間違いなし。

- 海あり、山あり、川ありで自然を身近に感じられる。天神からでも車で30分も走れば、海も山も川ものどかな田園風景にも出会える。
- 福岡といえば太宰府天満宮だが、その他にも光の道の宮地嶽神社、博多山笠の櫛田神社、日本三大修験山の1つ英彦山もある。
- 原鶴温泉、二日市温泉、脇田温泉、薬王寺温泉、船小屋温泉など、福岡にも温泉がある。

まだまだ良い所はたくさんあります。是非、九州・福岡へお越しください♪



にぎわいが戻りつつあるまち



開業まもなくの高級ホテル



近況 & イベントのお知らせ

「デザインコンペ in 三河安城」にて、 優秀賞・オーディエンス賞を受賞しました！

担当：植田啓太、内野絢香、辻寛太、竹中健起

安城市主催の「デザインコンペ in 三河安城」に今年度入社の新入所員4名で参加し、「まちのデザイン部門」にて「優秀賞」と会場投票による「オーディエンス賞」をダブル受賞することができました。

本コンペは、新幹線駅のある三河安城駅周辺エリアを対象に、豊富にある公共空間を活用し、地域の活性化につなげるための「まちのデザイン」のアイデアを提案するものでした。

私たちの提案は、今後、駅周辺のアリーナ建設を契機に、駅・ホテル・アリーナ利用者が夜に集まることに着目し、公共空間における光環境を操作することで、まちで活動する人とまちを訪れる人が出会い、つながるような仕組みをつくるというものです。

三河安城駅の夜はただただ暗く、豊富なオープンスペースがそれを際立たせているような状況です。一方で、私たちは「夜の道端で友達と何気ない会話をする」、「夕方から夜になり暗くなくても公園で遊び続ける」といった、夜に外で遊ぶことのワクワク感、夜だからこそ縮まる人との距離感等、夜遊びのもつ面白さというところから議論をはじめ、提案につなげていきました（夜遊びというあまり聞こえはよくないですが・笑）。

それぞれバックグラウンドの異なる新入所員4名で、業務の合間に時間をつくりながら一つの提案をつくりあげることが中々大変な作業でしたが、その過程でメンバーの関係性も築きつつ、なんとか結果を残すことができたことは非常に嬉しく思います。

今後、夜に色々な人が集まり、様々な夜遊びが楽しめる三河安城になることを期待したいです。

※提案者は、植田啓太、内野絢香、辻寛太、竹中健起の4名。作品は、「デザインコンペ in 三河安城」HPでご覧いただけます。

URL：<https://www.city.anjo.aichi.jp/kurasu/machidukuri/toshikeikaku/kyoso/dezainkonpe.html>



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

52回

2023年
3月3日

「地域をおいしく、おもしろく～「食」が拓く、
つながりの再構築～」

講師 立命館大学 食マネジメント学部
教授 高田剛司氏

第52回適塾路地奥サロンでは、立命館大学食マネジメント学部の教授であり、アルパックのOBでもある高田剛司氏をお招きし、地域をおいしく、おもしろく～「食」が拓く、つながりの再構築～というテーマでご講演いただきました。

講演では、「食」を起点として地域のコミュニティの再構築をもたらしている3つの事例（ROOTH 2-3-3（福岡県大牟田市）、キコリ谷テラス（京都府京丹後市）、ヤマト糰パーク（石川県金沢市））をご紹介いただきました。3つの事例の共通点として、①「食」の拠点づくり、②関係者のネットワークづくり、③「食」を取り巻く景観づくり、④ガストロノミーツーリズムの視

点が挙げられ、「食」は地域住民、生産者、飲食事業者、食品製造業者、交流・関係人口などの多様な人々を結びつけるキーワードとなることをご示唆いただきました。最後においしさの構成要素として、食品側の要因、人間（個人）の要因、環境要因の3つがあり、これらが揃い合うことで、本当のおいしさを感じられることをお話いただきました。

本講演を通じて、持続可能なまちづくりを考える上で、「食」が果たす役割はますます重要になってくると思われました。（山口 泰生）

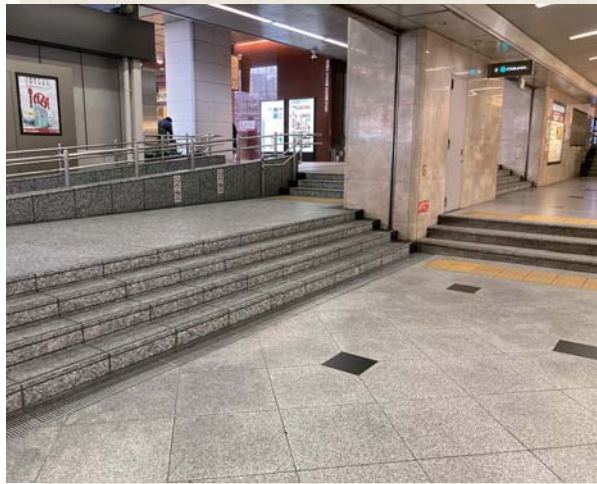




まち
かど

石川聡史

都市・地域プランニンググループ



大阪駅に段差・勾配が多すぎる件について

うめきたを始め周辺で再開発が続くJR大阪駅ですが、駅構内、周辺にはやたらと段差・勾配が多いと思いませんか。

大阪駅とその周辺は、梅田の名がつく私鉄の駅も合わせると一日に200万人以上が利用する西日本最大のターミナルです。3月18日にはうめきた地下にJR大阪駅の地下ホームが新設され、関空方面と直接結ばれることになりましたので、今後さらに多くの人が利用するようになるでしょう。

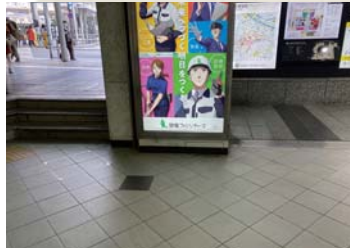
先日、ニュース番組で、その新設地下ホームにつながる東海道線

支線が大阪駅付近で急勾配になるため、貨物列車がそのままでは登り切れず、最後尾にも機関車を連結して運行されると報じていました。全国的にも珍しい例のようです。これは線路の勾配の話ですが、大阪駅では駅構内でもよく見るとスロープや段差がとても多いことに気づきます。日々利用する際には、特になんとも思わないのですが、いったんスロープで少し上がってからエスカレーターで下るといった謎の構造も見られます。改札内でもプラットホームに行くと、改札内でもプラットホームに行くまでいくつもの階段やスロープがあったり、やたらと高低差があったりします。プラットホームでもかさ上げしている部分が見られます。一体これは为什么呢。

有名な話として、梅田の地名の由来が「埋め田」から来たという説があります。古来、このあたりは低湿地帯で秀吉の時代に埋め立てて田んぼにした緩い地盤でした。そこに地下水のくみ上げをしすぎたこともあって地盤の不同沈下が起こり、このような状況をつくりました。元来、地盤が緩いところにこれだけ大規模な構造物を作れば、沈んでいくのも理解できます。

ちなみに、これが地盤沈下によるものと知ったのは、大学の土質工学の授業でした。それまで大阪駅を利用することがあっても特に意識することはなかったのですが、私にとっては意外な発見に興味を持ったものでした。そのときに建設中だった関西空港も海底地盤が緩く、放置すると海に沈んでいくとも教わったのを覚えています(今はジャッキアップしているようです)。

現在、梅田の地盤沈下は落ち着いているようですが、バリアフリーが求められる時代ですから、不特定多数の方が利用するような駅でこれだけの段差を放置し続けるわけにもいかないでしょう。いずれは根本的な解消が求められると思いますが、これだけ利用者が多いと、長期間人や鉄道を止めて大規模な工事をするのも困難と考えられます。拡大が続くターミナルで利便性と魅力を高めながら、いかにしてバリアを取り除いていくのか。これもまちづくりの一つとして考えると、この仕事に終わりはないと改めて感じます。



表紙写真：路地で出会ったネコ(撮影 坂井信行)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。



アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン(ベトナム)	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

